

映画製作におけるナラティブの翻訳と自己物語力の生成 ——パーキンソン病当事者との協働的実践の文化人類学的考察 Narrative translation and the generation of self-story power in film production: An anthropological study of collaborative practice with Parkinson's disease participants

古新 舜^{†‡§}

Shun Coney

[†] コスモボックス株式会社, [‡] JAIST 支援機構, [§] 東京電機大学
Cosmobox Inc, JAIST Support Organization, Tokyo Denki University
coney@cosmobox.jp

概要

本研究は、独立系映画『いまダンスをするのは誰だ?』の製作過程を対象に、当事者の経験がいかに共有可能なナラティブへと変容し、共感へ接続されるかを明らかにする。アクターネットワーク理論 (ANT) の翻訳概念を用い、オートエスノグラフィと参与観察、インタビュー調査を行った。その結果、映画製作は、病理や着物などの非人的アクターを含む相互作用を通じて、経験を再構成する文化的実践として機能していた。さらに自己物語力は、個人内在的能力ではなく、関係の網目の中で動的に生成される関係の能力であることが示唆された。

キーワード：自己物語力、映画製作、ナラティブ、アクターネットワーク理論 (ANT)、パーキンソン病

1. はじめに

映画製作は、監督や俳優、撮影スタッフといった人的アクターのみならず、脚本、資金、衣装、撮影機材、作品が扱う病いや社会課題といった非人的 (non-human) 要素を含む、多様な存在の関係によって成立する複合的な創造実践である (Braudy & Cohen, 1999; Petrie, 1991)。とりわけ独立系映画では、限られた資源のもとで、当事者、支援者、専門家、観客候補など、映画業界外の人々が製作過程に関与することも少なくない (Baumgärtel, 2011; Tezuka, 2011)。そのため映画は、完成作品として鑑賞される対象であるだけでなく、制作・流通・受容に関わる多様なアクターの協働を通じて、文化的価値や関係性が生成される社会的・文化的実践として捉えられる (Banks & Deuze, 2009; Chapain & Stachowiak, 2017)。

しかしながら、従来の映画研究では、完成された作品や、上映後の観客や社会による受け止め方に焦点が当てられることが多く、製作過程において意味や関係性がいかに形成されるかは十分に論じられてこなかった (土倉, 2010; 古新・白肌, 2026)。特に、当事者の経験が、取材、対話、撮影、編集を通じてどのように語りと

して再構成され、他者に共有可能なナラティブへと翻訳されるのかという問題は、検討の余地を残している (Grindon, 2007)。

くわえて近年の文化人類学では、人的アクターと非人的アクターの関係性を再考する視点が重視されている。人新世の議論においては、人類だけでなく物質や環境もまた行為に関与する存在として捉えられる (大村・湖中, 2021)。この視座は、映画製作における脚本、機材、衣装、病いといった非人的要素を能動的アクターとして捉える本研究の立場と親和的である。

そこで本研究では、パーキンソン病 (以下、PD) を題材とした独立系映画の製作実践を事例に、当事者の経験がどのように物語化され、他者理解や共感へ接続されるのかを明らかにする。具体的には、アクターネットワーク理論 (ANT) の翻訳概念を援用し、異種混交的なアクターがいかに連帯し、個人的経験が共有可能なナラティブへと変換されるのかを考察する。

2. 理論的背景：アクターネットワーク理論と自己物語力

2.1 アクターネットワーク理論における「翻訳」

本研究では、映画製作の過程を、異質なアクター同士が関係を結び直しながら意味を生成する実践として捉えるために、ANT の視点を援用する (Callon, 1986; Latour, 2005)。ANT は、人的アクターと非人的アクターを固定的に区別せず、いずれもネットワークを構成しうる行為主体として扱う点に特徴がある。本研究で重視するのは、Callon (1986) の「翻訳」概念である。翻訳とは、異なる関心をもつアクターが相互作用を通じて関係を調整し、一定の方向へ結びついていく過程を指す。この過程は、「問題化」、「関心づけ」、「取り込み」、「動員」の4段階として記述される。

映画製作の現場においても、監督、当事者、家族、支援者だけでなく、PD、着物、カメラ、映像といった非人的アクターが、人的アクターの行為や解釈を方向づける契機として働く。

2.2 ナラティブ変容と自己物語力

次に、本稿が認知的・実践的な側面から注目するのは、「自己物語力」(古新,2026a)という視点である。本稿ではこれを、自己の経験、とりわけ困難や葛藤を含む出来事を受動的に受け取るのではなく、新たな意味の連関へと組み替え、自らの生を語り直していく力として位置づける(古新,2026b)。これは完成された固定的な性格特性ではなく、他者との対話や表現行為を通じて生成・変容する関係的な力である。

人びとの経験は、それ自体が固定的な意味をもつのではなく、語りを通じて位置づけられ、その意味は他者との相互作用のなかで更新される。やまだ(2000)が示すように、語りは出来事の再現ではなく、経験の再構成の営みである。また、川浦(2004)は、セルフ・ナラティブを通じて経験を意味づけるプロセスが、抑圧からの解放やエンパワメントに結びつくことを指摘している。

したがって、病いを抱える当事者が映画製作を通じて自らを表現することは、既存のアイデンティティを反復するのではなく、新たな自己理解と社会的承認を獲得する契機となる。本稿では、このようなナラティブの再編集を可能にする動態を、自己物語力の発現として捉える。

3. 研究方法

3.1 調査対象と調査期間

本研究の対象は、筆者が監督を務めた独立系映画『いまダンスをするのは誰だ?』(2023年10月公開)の製作過程である。本作はPDを題材とし、当事者への理解促進と就労支援を目的として製作された。調査期間は2020年9月から2024年10月までである。

主たる対象者は、愛知県在住のPD当事者A氏、その夫B氏、和装デザイナーC氏である。A氏は「着物を着た結婚式を挙げられなかった」という未達の夢を抱えていた。B氏はA氏の日常生活を支える主要な支援者であり、C氏はユニバーサルデザインの婚礼着物を手がける専門家として関与した。本研究では、これらの人的アクターに加え、PD、着物、カメラ、映像素材、

SNS 発信物といった非人的アクターも分析対象とした。

3.2 調査方法と分析手順

本研究では、映画製作という社会的実践の内側から意味形成の動態を記述するため、参与観察とオートエスノグラフィ(土元・サトウ,2022)を組み合わせた。筆者は監督としてA氏の生活世界に関与し、対話や撮影を通じて、語りが製作プロセスと相互に影響し合う過程を記録した。また、監督としての意思決定や倫理的葛藤をフィールドノートに記録し、当事者のナラティブ変容を追う視点と、監督自身の認識変化を追う視点を交差させた。

データは、計9回のインタビュー逐語録、撮影・編集現場での参与観察記録、SNSやメディア発信物から構成される。インタビューはZoomによるオンライン形式および現地訪問による対面形式で実施し、すべて音声記録のうえ逐語録を作成した。分析は2段階で行った。

第一段階では、ナラティブ分析(Riessman,2008)を用い、逐語録を繰り返し精読したうえで、「生活の困難と対処」「自己認識の変化」「映画参加への動機と変容」などの主題ごとにコーディングを行い、時系列的な語りの変容パターンを析出した。この際、単一のインタビューのみならず、複数回にわたる語りの変化を縦断的に追跡することで、製作過程と語りの相互作用を可視化した。

第二段階では、第一段階で得られた語りの変容パターンを、ANTの翻訳過程、すなわち問題化、関心づけ、取り込み、動員の各段階に対応させて再解釈した。具体的には、PD、着物、カメラといった非人的アクターが、翻訳の各段階においていかなるエージェンシー(行為主体性)を発揮し、人的アクターの役割認識や語りの方向性をどのように変容させたかを、参与観察記録およびフィールドノートとの照合を通じて体系的に分析した。

なお、本調査は北陸先端科学技術大学院大学ライフサイエンス委員会の承認(人02-018,人03-002,人04-004,人05-001,人05-074,人06-072)に基づき、調査開始前に全対象者からインフォームド・コンセントを取得したうえで実施した。また本稿に掲載した図1については、写真に写るA氏およびB氏の双方から、本学会大会での発表および予稿集への掲載に関する書面での同意を事前に得ている。

4. 調査結果

4.1 問題化：未達の夢と「病い」の再定義

翻訳の第一段階である「問題化」において、筆者（監督）は PD 当事者である A 氏の生活世界に参入した。当初、A 氏の語りにおいて PD は、自らの身体的自由を奪い、「着物での結婚式」という過去の夢を断念させた「障壁」として語られることが多かった。もっとも、A 氏が取材や製作への協力に応じたこと自体が示すように、PD への意味づけは一樣ではなく、両義的な揺らぎを含んでいた。

筆者は取材を通じ、A 氏のこの未達の夢を映画という表象のネットワークに組み込むことを提案した。ここで、単なる「闘病の記録」ではなく「夢の再演」という新たな目標を提示したことは、関係アクターにとっての「必須通過点」の設定として機能した。

これにより、A 氏にとって PD は、単に身体的自由を制約するものとしてのみ経験されるのではなく、映画製作という実践を通じて、他者に伝えうる意味を帯びたナラティブへと再定位される契機を得た。

4.2 関心づけ：非人的アクターとしての「婚礼着物」のエージェンシー

第二段階の「関心づけ」では、非人的アクターである「婚礼着物」が決定的な役割を果たした。A 氏にとって着物は、病いによる身体の震えや硬直のために「着ることが不可能なもの」であった。しかし、ユニバーサルデザインを手がけるデザイナー C 氏の関与により、着物は「病いを抱えたままでも纏える表現媒体」へと翻訳された。和装撮影の現場において、A 氏が婚礼着物を纏い、B 氏と並んでカメラの前に立つことは、未達であった夢を映画製作の場において再演する経験となった（図 1）。

図 1 婚礼着物を纏った A 氏と B 氏の和装撮影場面



この場面において、A 氏の語りは「病いに縛られた

自己」から「美しさを回復した自己」へと揺れ動いた。ここでは、着物という物質的なエージェンシーが、A 氏と PD の関係性を媒介し、新たなアイデンティティへの関心を引き出す仕掛けとなったのである。

4.3 取り込み：身体的経験から「自己物語力」への昇華

「取り込み」の段階では、撮影という身体的実践を通じて、各アクターの役割が確定されていった。監督である筆者は、A 氏を単なる「被写体」としてではなく、自らの経験をナラティブとして再構成する「表現主体」としてネットワーク内に位置づけた。A 氏は、カメラという「見つめる他者」を意識することで、自らの身体の不自由さを「恥じるべき症状」ではなく、「生を象徴する証し」として受け容れ始めた。これは筆者が提唱する「自己物語力」の発現であり、自身の経験を「病者の物語」から「一人の人間の尊厳の物語」へと再編集するプロセスそのものであった。

4.4 動員：個人的ナラティブの社会化と連帯

最終段階の「動員」において、A 氏の個人的な経験は、映画の断片（メイキング映像や SNS 発信）を通じて、他の PD 当事者や支援者という広範なアクターへと共有された。A 氏の「着物を着て踊る」という身体的実践は、彼女一人に閉じた成功体験に留まらず、同様の困難を抱える多くの人々のナラティブを誘発する結節点（ノード）となった。これにより、当初は A 氏の個人的な葛藤であったものが、映画製作というネットワークを通じて、社会的な共感を呼ぶ「共生的なナラティブ」へと翻訳され、大規模な連帯へと動員された。

5. 考察と結論：自己物語力を生成する共生的ナラティブ

5.1 「翻訳」を通じたエージェンシーの変容

分析により、当事者のナラティブ変容は、PD（病理）や着物といった非人的アクターとの「翻訳」プロセスを経て生じることが示された。当初は行動を制約する負の存在であったこれらのアクターは、撮影という相互作用（関心づけ・取り込み）を通じ、自己表現を支える正のエージェンシーへと翻訳された。これは認知科学的に、個人の認知枠組みが外部の物質的環境（ネットワーク）との相互作用により拡張・変容するプロセスである。

5.2 自己物語力の質的転換

本研究が提唱する「自己物語力」は、個人の内在的な心理特性ではなく、苦難を社会的な表象ネットワークの中に位置づけ直す「社会的な編集能力」である。A氏がカメラの前で身体の震えを肯定的に受け容れた瞬間、自己物語力は個人的救済を超え、社会への問いへと昇華された。ここで重要なのは、自己物語力が「前向きに考える力」として個人の内面に閉じるものではない点である。

本事例では、その語り直しが、監督との対話、着物、カメラ、映像、観客候補といった複数のアクターとの関係の中で生じた。自己物語力は、自己の内面だけで完結する認知能力ではなく、他者やモノとの相互作用を通じて生成される関係的な力として理解できる。映画製作という動的プロセス自体が、既存の認識を解体し再構築する「生成的プラットフォーム」として機能しており、自己物語力はその関係性の網目の中で動的に生成されることが示唆された。

5.3 結論と今後の課題

本研究は、ANTの翻訳概念を通じて、映画製作が単なる創作活動ではなく、人的・非人的アクターが相互に関与しながら意味を生成していく翻訳過程として機能することを示した。この過程において、当事者の語りは断片的な経験から他者と共有可能なナラティブへと再構成され、その変容は他者との対話や協働、さらにはカメラや映像といった非人的アクターとの相互作用のなかで生成されるものであった。

以上から本研究は、自己物語力を個人の内在的な能力としてではなく、異質なアクターとの関係性のなかで動的に生成される関係的な力として再定義する。映画は完成された作品としてのみならず、製作という実践の過程においてすでに、自己の再編集と社会的連帯を生み出す場として機能しているのである。今後の課題として、第一に、映画公開後の観客の参与によるナラティブの変容過程、第二に、単一事例を超えた複数事例の比較による知見の一般化可能性の検討が求められる。

6. 謝辞

本研究には、多数の映画関係者ならびにA氏やご家族の方たちのご協力を得た。厚く御礼申し上げたい。

文献

- Banks, M., & Deuze, M. (2009). Co-creative labour. *International Journal of Cultural Studies*, 12(5), 419–431.
- Baumgärtel, T. (2011). Imagined communities, imagined worlds: Independent film from South East Asia in the global mediascape. *Transnational Cinemas*, 2(1), 57–71.
- Braudy, L., & Cohen, M. (Eds.). (1999). *Film theory and criticism: Introductory readings*. Oxford University Press.
- Callon, M. (1986). Some elements of a sociology of translation: Domestication of the scallops and the fishermen of St Brieuc Bay. In J. Law (Ed.), *Power, action and belief: A new sociology of knowledge?* (pp. 196–233). Routledge & Kegan Paul.
- Chapain, C., & Stachowiak, K. (2017). Innovation dynamics in the film industry: The case of the Soho cluster in London. In C. Chapain & T. Stryjakiewicz (Eds.), *Creative industries in Europe: Drivers of new sectoral and spatial dynamics* (pp. 65–94). Springer.
- Grindon, L. (2007). Q & A: Poetics of the documentary film interview. *The Velvet Light Trap*, 60(1), 4–12.
- Latour, B. (2005). *Reassembling the social: An introduction to actor-network-theory*. Oxford University Press.
- Petrie, D. J. (1991). Creative collaboration and the production process. In D. J. Petrie (Ed.), *Creativity and constraint in the British film industry* (pp. 168–204). St Martin's Press.
- Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. Sage Publications.
- Tezuka, Y. (2011). *Japanese cinema goes global: Filmworkers' journeys*. Hong Kong University Press.
- 大村 敬一・湖中 真哉 (2021). 「人新世」時代の文化人類学 放送大学教育振興会
- 川浦 佐知子 (2004). 語りの力学：セルフ・ナラティブ（自己物語）を通してのエンパワメント 南山大学紀要（人文学部心理人間学科）, 3, 122–134.
- 古新 舜 (2026a). ギブ・ミー・マイライフ！：自分を生きるための自己物語力 みらいパブリッシング
- 古新 舜 (2026b). 映画製作における多元的アクターの連帯による共生的価値共創：アクターネットワーク理論に基づく独立系映画製作の資源統合過程のエスノグラフィ 博士論文 北陸先端科学技術大学院大学
- 古新 舜・白肌 邦生 (2026). 顧客や非人的アクターと共創する独立系映画のサービス・オフリングプロセス：アクターネットワーク理論の翻訳を通じて サービスロジー, 10(1), 1–20.
- 土倉 英志 (2010). 創作プロセスにおけるプランの役割の検討：映画撮影のフィールド研究 認知科学, 17(4), 713–728.
- 土元 哲平・サトウ タツヤ (2022). オートエスノグラフィーの方法論とその類型化 対人援助学研究, 12, 72–89.
- やまだ ようこ (編著) (2000). 人生を物語る：生成のライフストーリー ミネルヴァ書房